現代GP特集にあたって

池上 甲一

Project Leader's Address for Special Issue on Education in the 'Satoyama'

Koichi IKEGAMI

文部科学省は、社会的なニーズにこたえるための教育改革を支援する事業（いわゆる現代ＧＰ）を行っている。現代GPとはいくつかのテーマを設定して、そのテーマごとに募集を行い、それぞれ年間数件程度に助成金を交付するというものである。近畿大学農学部では、「里山の修復活動を通じた環境理解教育の実践」をテーマとして環境分野に応募したところ、幸いにも平成18年度の現代GP事業として採択された。これは、近畿大学では最初の現代GPだったことも付け加えておきたい。平成20年度は3カ年の最終年度にあたり、事業の成果を取りまとめているところである。今回の現代ＧＰ特集も、その一部をなしている。

この取り組みの目的はいうまでもなく環境理解教育の推進にあるが、もう少し具体的にブレークダウンすると次の2点に集約できる。第1に、里山を素材として人間と自然とのかかわり合い（相互交渉過程）についての洞察と生命への愛情を育むことであり、第2に持続可能な社会に向けた環境倫理を身体に内面化させることである。これら2つの目的は、取り組みの副題である「キャンパス里山を素材とする人間と自然の相互作用の理解と環境倫理の養成」に表現されている。こうした環境理解教育によって、深い環境認識と生命観に支えられた確かな知的構想力を持つ技術者や企業人を養成したいというのが本取り組みの最終的な教育目標である。

こうした目標を実現するために、本取り組みでは下記の4点に重点を置いて事業を進めてきた。第1のポイントは、里山修復を農学の視点からの教養教育として位置づけるということである。とくに農学部は多様なプリンシプルの学科から構成されているが、いずれも生命を研究対象としている点で共通性を持つ。しかし、学年が進んで専門教育の比重が高まってくると、この共通性がかすんでしまい、ついつい学科あるいは研究室独自のプリンシプルに閉じこもりがちとなる。だからこそ、専門性の基盤に備えるべき教養教育が重要なのであり、里山修復を通じた生命観の練磨はそのような効果を持ちうると考えたのである。

第2のポイントは、実践と経験を蓄積し、経験知と科学知の双方の世界を知ることによって、科学への理解を深めてほしいということである。もとより、経験知と科学知の統合は容易なことではないが、そうした方向性が大切だという意識を持つきっかけづくりは可能だと思われる。さらに言えば、第2のポイントには、実践や経験の中から科学知では見えてこない世界や見逃されている現実があるということを認識してほしいという取り組み責任者の思いも込められている。そうした見方を実践の中で体に染みつかせていく、つまり身体に内面化することによってしか生命倫理や環境倫理は体得できないからである。

第3のポイントは、第2のポイントとも関連するが、地域からの学びとコラボレーションである。里山を舞台として多少の実践を展開してみても、そう簡単には経験知まで高めることはできない。それはやはり、里山の管理に携わってきた地元の人たちの知恵や自然観に頼らざるを得ない。あるいは、NPOといった形で活躍している人たちのノウハウを学ぶことによって強化しなければならない。いわゆるローカルナレッジの意味を重視したいということである。

第4のポイントは、学生参加型の教育である。ここで、参加型というのは日ごろ受け身になりがちな学生という立場を超えて、正課教育のプログラムや内容、正課外教育の活動企画や運営についても関与したり、みずから教える側に立ってみるということを意図している。そのために、農学部

独自の認定制度である「里山学生インストラクター制度」や各種調査班の設立、里山活動のための学生団体の設立、協力要請といった仕組みを考案してきた。

本取り組みの詳細については別途作成される『現代GP最終報告書』を参照していただくこととして、ここでは第4のポイントである学生参加型の教育を進めてきた成果の一つが今回の現代GP特集だということを述べておきたい。

農学部では3回生や4回生になって研究室に分属されると、それなりに「参加」型の教育を受けることになる。しかしとくに1回生や2回生の間は、もっぱら受け身の教育を受けることが一般的である。それに対して、里山修復プロジェクトの教育プログラムでは学生団体や各種調査班として、学生たちの企画と意欲に基づいて独自の活動（調査を含む）を行うことが可能である。そうした調査や交流活動を具体的な形として残していくことは教育・研究上たいへん有益なことだと考えられる。そこで、里山委員会では成果の展示や発表についてもさまざまな機会を設けてきたが、さらに文章として残すことについてもその重要性を強調してきた。

その結果、今回の紀要にはたくさんの学生たちからの投稿が集まった。もちろん、すべての投稿が研究論文として求められる水準に到達しているとは言えないし、また調査や分析は精粗さまざまである。しかし、荒削りながらも貴重な調査成果や活動経過、あるいは専門研究者には思いつかないような視点が多く含まれていることも事実である。こうした事実と学生参加型教育を現代GP事業の重点に定めているということとを勘案して、通常の研究論文とは別の枠組みで紀要に掲載させていただくこととした。関係各位のご理解とご指導を得られれば幸いである。